

お薬のしおり

バセドウ病について No.115(H23.9)

東京医科大学病院 薬剤部

甲状腺がどのような働きをしている臓器か知っていますか？甲状腺はのどぼとけのすぐ下あたりにあり、正面から見ると蝶のような形をしている臓器です。甲状腺は脳かすいたいの下垂体で作られる甲状腺刺激ホルモンの命令をうけて、食物（海草類に多い）に含まれるヨードを原料に、甲状腺ホルモンを作っています。ホルモンとは私たちの体の中でつくられ、体の他の部分のはたらきに影響を与える物質のことです。甲状腺ホルモンは血液の中におくりこまれ、全身の細胞の新陳代謝しんちんたいしゃを活発にするという重要な働きがあります。心拍数を上げたり、消化管からの糖の吸収を促進して血糖値を上げたり、体や脳を发育させたりする作用もあります。

甲状腺のはたらきが亢進こうしんしている場合を甲状腺機能亢進症といいます。そのほとんどはバセドウ病です。この異常には免疫めんえきが関係しています。免疫は侵入した外敵を攻撃し、健康を維持するための大切な仕組みです。ところが、まれに自分自身の体を攻撃目標とする抗体こうたいを作ってしまう病気があります。これを「自己免疫疾患じこめんえきしっかん」といい、バセドウ病もこの一種です。バセドウ病では甲状腺を刺激する抗体こうたいができ、甲状腺ホルモンがたくさんつくられます。バセドウ病は成人の200～300人に1人の頻度でみられ、20～40歳の女性に多く発症します。

バセドウ病になると甲状腺ホルモンの過剰な働きにより、さまざまな症状がでます。次のような症状が複数あれば、バセドウ病を疑う必要があります。

- ☆汗をたくさんかく
- ☆息切れしやすい
- ☆手がふるえる
- ☆体重が減少する

- ☆疲れやすくなる
- ☆心臓がドキドキする
- ☆食欲があがる
- ☆首がはれる



など

バセドウ病の治療には、薬物療法、アイソトープ療法、手術の3つの方法があります。日本では特別な事情がない限り、まず抗甲状腺薬で治療を開始します。

抗甲状腺薬にはチアマゾール（商品名：メルカゾール）とプロピルチオウラシル（商品名：チウラジール、プロパジール）があります。これらの薬は血液中に入り甲状腺細胞内に取り込まれ、甲状腺ホルモンを合成するときに必要な酵素こうその活性を阻害してホルモンの合成を抑制します。抗甲状腺薬が効いているかどうかは、血液中の甲状腺ホルモンの量を指標にします。通常、長期間服薬を続け、甲状腺の働きが正常になってきたら、薬を徐々に減らし、甲状腺を刺激する抗体がなくなったら、薬をやめられるか検討を行います。

抗甲状腺薬で注意しなければならない副作用むかりゆうきゅうしゅうに無顆粒球症むかりゆうきゅうしゅうがあります。無顆粒球症とは血液中の白血球の成分のうち顆粒球かりゆうきゅう（特に好中球こうちゅうきゅう）が減少し、ほとんどなくなる病気です。無顆粒球症になると、細菌等に感染しやすくなり、肺炎や敗血症はいけつしゅうなどの重症感染症を起こします。初期症状として、かぜや扁桃腺炎へんとうせんえんのときと同様な発熱や喉の痛み、全身のだるさ等が出ます。副作用が出ていないかどうかを確認するために、投与開始後約2カ月間は2週間に1回の血液検査が必要となります。

抗甲状腺薬が副作用で使用できないか、効果が十分でない場合には放射性ヨードの入ったカプセルを内服するアイソトープ療法または甲状腺を摘出する手術を行います。

バセドウ病の症状の1つである手のふるえに対してはβ遮断薬べーたしやだんやくという種類の薬こうかんしんけいで交感神経の働きを抑えて、症状を和らげることができます。

甲状腺機能亢進症の症状がある場合には早めに専門医を受診しましょう。そのとき、出ている症状を細かく医師に伝えることが大切です。バセドウ病はうまくコントロールできれば、普段どおりの日常生活が送れます。薬は、症状が落ち着いていても自己判断で中止したりせず、決められた用法を守りましょう。

